

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2012年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学 専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程4年	吉田 恵理	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部教授	石川 巧	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	大正・昭和戦前期における近代詩のテキスト生成過程研究		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程4年	吉田 恵理	
研究期間	2012年度		
研究経費	200	千円（実績額又は執行額）	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、中原中也と富永太郎を対象として、草稿および直筆資料の分析をもとに詩テキストの生成過程を明らかにするものである。基礎的研究の充実した中原研究に対し、その基礎資料（『新編中原中也全集』角川書店）のより発展的な活用法を探究する。また、これまで中原中也の周辺に位置づけられ、未だ活字化されていない直筆資料を多く有する富永太郎を対象として、未発表資料を解読・翻刻し広く公表する。共通する問題意識を持ち、深く影響を受け合いながらも、全く別様の詩的言語をテキストに残した両者を比較しつつ同時進行で研究するのは、互いが互いの表現的特徴を相照らす関係にある為である。詩的言語創造のプロセスに迫る為の生成過程研究によって、大正一昭和初期における詩の表現史の問題を考察したい。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[中原中也] [富永太郎] [近代詩]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、中原中也と富永太郎の詩テキストを、執筆時期の縦軸のみならず、構想メモなどのプレテキストや引用関係にある間テキストを横軸としてその布置を考察するものである。

『新編中原中也全集』(角川書店) 第二巻解題は、「昭和九年の一年間を通じて、中原は道化した口調の詩篇を数多く制作」していると指摘するが、その〈道化調〉は、決して単なる「口調」の問題に収まるものではない。そしてこの身振りはまた、詩の構造にも深く関わる。〈道化調〉の身振りがどのように問題化されるかを、先行論を参照した上で明らかにしておきたい。

菅谷規矩雄(『新装版現代詩読本 中原中也』思潮社、一九八三・六)は、いわゆる〈お道化〉た口調とされる詩篇ではなく、中原の詩に用いられる七五調という伝統的な韻律を「本質的な意味合いでパロディの韻律、「お道化うた」の調子、ひいては強い同化(assimilation)をはたすための仮装のべらんめえ口調(傍点原文、以下すべて同)と捉えた。菅谷の議論は、中原の詩の「パロディ」性の行方を追ったものとも言えるのであり、七五韻律における、語り口による二次的な意味内容の発生を、昭和初期の表現史の問題として提出している。菅谷は中原の「饒舌体の七五調」に「中原のことばの根底にひそんでいるたえざる〈不安〉」を想定し、中原の技法の限界をも示すのであるが、その「限界」は言葉の身振りを作者の身振りとして捉えるがゆえに齎された論理的帰結である。

それに対して、北川透(『中原中也わが展開——天使と子供』国文社、一九七七・五)は、中原の詩における表現の主格の特徴的なあり方を考察している。北川は〈お道化〉た口調で書かれたものを一つの典型として、中原の詩の一人称主格が、その内部で「私」性を失い始めたり別の人格と同化したりするといったような動的な位相で表出されていると論じる。北川は「非人称の仮構」という書き手の意識を想定することで、仮構性の強度と比例して予め主体性を与えられた一人称から主体性が離脱していく様相を語り得たが、「主体」の分裂性や複数性を見る為には、「主体」が解体され再編される過程が語り口によってどのように構造化されているかを検討する必要がある。語り口は位相差自体を強調して一人称を主体化させる機能も負うのであり、〈道化調〉の身振りの「非人称」性こそが問題とされねばならない。本研究は〈道化調〉を語り口のレベルと意味内容のレベルの間にねじれを発生させ何がしかの含みを暗示する言葉の身振りとして捉える。その上で、「秋岸清涼居士」という一九三四年に書かれた未発表詩篇を対象として、〈道化調〉の身振りと一人称主格の位相の変化の関係を分析し、この詩篇が持つ名づけをめぐる問題の形を浮かび上がらせる。

だが、詩の分析の前に、〈道化調〉詩と〈宮沢賢治〉との関連を見ておかなければならない。先の解題が「道化した口調の詩篇」として挙げている「ピチベの哲学」「狂気の手紙」「骨」「道化の臨終(Etude Dadaistique)」「お道化うた」「秋岸清涼居士」「月下の告白」「星とピエロ」「誘蛾燈詠歌」「(なんにも書かなかつたら)」という十篇のうち、太字ゴシック体で示した詩に〈宮沢賢治〉の影響が指摘されるのである。「秋岸清涼居士」では、最終聯に「世紀も眠る此の夜さひと夜」という「原体剣舞連」(『春と修羅』所収)の「樹液もふるふこの夜さひとよ」からのアレンジを加えた引用が挿入されている。一九三四年および一九三五年頃の〈道化調〉詩と〈宮沢賢治〉との関連はやはり看過できない。草野心平編「宮沢賢治研究」創刊号(一九三五・四)誌上で、〈宮沢賢治〉評価が急速に高まる没後の同時代状況に対し、「忌々し」さを表明した中原の〈宮沢賢治〉理解とはどのようなものだったのか。

本研究は〈宮沢賢治〉に言及している中原の言説を以下のように『宮沢賢治全集』について書かれたもの(A群)と「作品」について書かれたもの(B群)に大別して読み直した。

A—③「(無題)(自体、一と息の歌)」(未発表、一九三四・九・一九の日付あり)

A—①「宮沢賢治全集刊行に際して」(「作品」一九三五・一)

A—②「宮沢賢治全集」(「宮沢賢治研究」一九三五・四)

B—①「宮沢賢治の詩」(「レツェンヅ」一九三五・六)

B—②「宮沢賢治の世界」(「詩園」一九三九・八※没後発表、制作時期は一九三四・一〇——二頃と推定されている)

中原の一連の〈宮沢賢治〉評を、「全集」観と「作品」論とに分けることによって、これまで中原中也研究において問題視されてきた〈民謡の精神〉—A群において使用される—という言葉捉え直し、その上で、中原が〈宮沢賢治〉の「詩」について特に重要視していたのは、むしろ〈民謡の精神〉においてではない、ということが明らかにできる。すなわち、〈宮沢賢治〉の「作品」における〈書く〉ことのありようを論理化してみせたB群にこそ、中原にとっての〈宮沢賢治〉という問題系の核心がある、ということである。同時代における中原の「詩」は、それを起点として読み直していく必要があるのではないか。本研究は、B群に見られた論理の詩的展開を「秋岸清涼居士」の中に追うことで、名づけを拒む〈道化調〉に始まりながら、「秋岸清涼居士」といういまは亡き人への名づけをしてしまうこの詩篇の名づけをめぐる問題を読み解き、中原の〈道化調〉と〈宮沢賢治〉理解がどう関わっているのかを考察する。敢えて未発表詩篇を取り上げるのは、〈道化調〉と〈宮沢賢治〉の関わりが見やすく、ここにおそらくは未発表であるからこそ挿入された〈宮沢賢治〉からの引用がどのような意味を持つのかをテキストの生成過程に含まれるものとして問題化するためである。この点についてはA群の問題意識との関わりを含めて検証する必要がある。

分析の結果得られたのは、〈道化調〉の身振りが、〈私〉の語りが〈私〉と〈僕〉の位相の往還の末にあることを知っている者の身振りであり、〈私〉がある出来事を経験したということ自体を〈私〉の言葉に付与する機能を持つことであっ

研究成果の概要 つづき

た。「秋岸清涼居士」の〈道化調〉が拒むのは、「冥府(あのよ)」を——〈弟〉の死を——「遠さ」によって縁取り、形象化することである。それは同年代に書かれた「星とピエロ」における、「銀河系」の「遠さ」と「神秘」を「ウソ」だと言いつ張る態度との間に確かな連続性を持っている。「秋岸清涼居士」が「星とピエロ」よりも重層的で発展的であると見なせる理由は、名づけを拒む態度を引き延ばしていく先に、死んだ〈弟〉のその不在に打ちのめされる〈僕〉の位相をも登場させている点にある。この名づけを行う〈僕〉の位相との対比と侵犯し合う関係こそが、〈私〉の位相の不安定なあり方を下支えし、「此処」／〈私〉を刺し貫いて融け合ってくる死者とその名づけ得ぬ世界の感得の表現を成立させているからだ。〈道化調〉の身振りは位相差を強調する役目を果たしてもいて、〈私〉でも〈僕〉でもない者の声のように振る舞いつつ、〈私〉や〈僕〉の語り口の中へ介入しもする。そうした振る舞いの「非人称」的なあり方を見なければ、この詩篇が構造として持つ名づけをめぐる問題を捉えることが出来ない。そして〈道化調〉に支えられた名づけをめぐる問題は、B群に検証し明らかにされたように、〈宮沢賢治〉の「詩」において〈ニガムシつぶした所〉(名辞以前)に可能な限り長く留まるといふ書き方——「翻訳しつつあ」といふ書き方——が為されている、と捉えられたものが、中原の「詩」においてはどのような展開を見せたかという問題として立ち上げることが可能である。そのことは、没後の〈宮沢賢治〉評価が急速に高まる一九三四——一九三五年頃の状況を、どのような「詩」を書くことで中原が生き抜いたのかという痕跡を確かめることにつながるはずである。

〈私〉の語り口が〈道化調〉へと変化することで〈私〉に名づけを行わせる「秋岸清涼居士」の末尾は、〈ニガムシつぶした所〉(名辞以前)にいかにか長く留まれるかが表現にとって最も重要であるにも関わらず、表現は常に〈ニツコリする所〉(名辞以後)の振る舞いとしてあらわれるという〈書く〉者の認識でもある。中原が〈宮沢賢治〉の「詩」に読んだのも、そのような〈書く〉者の宿命を自覚した人の書きぶりだったのだ。

中原における〈宮沢賢治〉の語彙や詩句というA群の問題を踏まえれば、「世紀も眠るこの夜さ一と夜」という変形され匿名性を付与された引用が、〈宮沢賢治〉の詩句を「変遷してゆく」ことを前提とする〈型〉／〈伝統〉として「引用」といふ遂行的な意味合いを有していることもわかるということも付言しておきたい。「秋岸清涼居士」は、〈宮沢賢治〉が遺した詩的言語を祀り上げるのでも内面化するのでもなく死者の言葉として招き入れていたのである。

一方、中原との関係深く、中原と同じように、没後ではなく大正期の〈宮沢賢治〉詩を高く評価したのが富永太郎である。富永にとっても、やはり詩の方法論は「翻訳」の問題意識を常に抱えるものであった。また富永の詩も、たとえば「鳥獣剥製所 一報告書」に挿入されたフランソワ・ヴィヨン『遺言詩集』の翻訳体のように、「引用」に独特の連続性が施されている。

「無題 京都」は、一九二五年三月「山繭」第四号に発表された富永の詩篇であり、副題の「京都」から京都滞在中の思い出を材料としたものとされている。生前発表された数篇の中でもとりわけ「秋の悲歎」や「鳥獣剥製所」「断片」などに言及が多いのに対して、「無題 京都」は近年なお「マイナー」な詩篇の位置づけを与えられている。

「無題 京都」には三つの自筆原稿が存在する。以下はその推敲過程から判断して時系列に並べたものである。

【1】「(無題 京都)」草稿(タイトルなし)

【2】[詩三篇] ①「無題 京都」②「熱情的なフーガ」③「無題(幾日幾夜の…)」

【3】[恥の歌 外三篇] ①「四行詩」②「頌歌」③「恥の歌」④「無題 京都」

その生成過程において「無題 京都」がどの詩篇とモチーフを共有していたのかを探り、推敲段階での詩的言語の練られ方(たとえば漢語→カタカナ→漢語と動くプロセス)、初出誌への掲載のされ方から考察されるテキストの配置によって、富永における「翻訳」の問題をより先鋭化させることが可能であることを論証する。富永という詩人の位置付けは、ボードレールらのフランス近代詩の翻訳を通じて学んだ「批評的理知」によって詩を書き得た先駆者とされてきたが、ここでの「翻訳」は酒井直樹(『日本思想という問題——翻訳と主体』岩波書店、一九九七・三)による〈翻訳〉の表象と行為をめぐる議論を参照した上でテキストから析出される論理である。

富永のテキストにおいて、表象に与えられた身振りによって構造化される「翻訳」の論理が導くのは、「恥の歌」の倫理である。それは[恥の歌 外三篇]というタイトルに「無題 京都」が繋がざ合はされる回路を通して可視化される。

「無題 京都」の構造から読み取れるのは、詩を書くことは決して外界に出て行くことにならず、「部屋」から「部屋」へと「移動」し続けるという「翻訳者」の認識と深い諦めである。しかし諦めとともに受け入れられた「翻訳者」の自覚は、それでも「恥の歌」をうたい続けるという倫理を導いている。

中原と富永がともに「語る」ことへの不信に突き当たり、どのように「語りかけ」ることを自らの方法としたか。それはもちろん両者に固有の問題ではなく、近代詩史的には山村暮鳥以来の言語観の問題であり、大正—昭和初期の表現史の問題へとつながるはずである。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 吉田恵理 「〈翻訳〉の論理と〈恥の歌〉の倫理——富永太郎「無題 京都」を中心に——」

『立教大学日本文学』108号、2012年、45-56頁

④ 吉田恵理 「中原中也の〈宮沢賢治〉を見る眼」

四季派学会・宮沢賢治学会イーハトーブセンター合同研究会、2012年12月15日、大妻女子大学千代田キャンパス